

## 「ころも」偏



藤 堂 恭 俊

随想

私たち身を僧籍に置く者は、洋服、和服、法服のそれぞれを、ひととおり着こなさなければならぬ。どのいでたちが一番よく似合うかではなく、どれを身にまともても、表情態度、動作のすべてが、その服装に一番似つかわしくありたい。少くともそれが着こなす一つのポイントだと思う。

私は、いつ頃からか覚えはないが、どういうわけか、幼い頃から和服の襟元をあわせて、首から下の肌をあらわにしないように着る癖がある。祇園畏隈に育ったからではあるまいと思うが、そうかも知れない。男女共学の小学校時代、四年を終えて歌舞練場へ転学して行った人たちは多く和服で、襟元のはだかる

のをいつも直していた。そうした仕種が、いつしか私に薫習したのかも知れない。それはともかく、男らしくない、といわれた覚えはたしかにある。

私たちが宗祖と仰ぐ法然上人の御影を拝見すると、すべてといつてよい程、襟元をはだけず、あわせて着ていられるのに気づいて、自分の癖の根元をそこに見出した思いにかられ、誇らしくも思ったことがある。二尊院の足曳きの御影、知恩院の隆信の御影、信実の御影、金戒光明寺の鏡の御影などに共通して気づくことは、私たちが肌着とする襦袢をお召しになっていないことである。襦袢という名称はポルトガル語のジバオ *jabão* からきているから、上人が襦袢と呼ばれる肌着をお召しなさる筈はない。しかし近年、奈良の興善寺の本尊阿弥陀如来立像の胎内から発見された正行房に宛られた上人の消息のなかに、「さて御<sup>小袖</sup>こ所てたしかにたまはり候ぬ」と記している。小袖は平安朝後期までは男女の下着として着用され、それが表着に着用されるようになったのは鎌倉時代のことであると言われている。おそらく上人は頂かれたこの小袖を下着としてお召しになっていたのであろうこと

が察せられる。服飾についてあかるくない私は、小袖の襟がどうして上人の白衣の襟下から顔をのぞかせないのか、と首をかしげるばかりで、どなたかに教えを乞いたいと思っている。

ミニスカートの着用も年久しくなつて、当初のように眼のやり場に困ることもなく、膝上〇〇センチも結構たのしめるように慣らされたこの頃、海水浴に水着をつけることを法令で定めようとしたら、州議会に全裸のまま抗議デモをかけたとか、気の弱い、昔気質の私の気を遠くさせるニュースが、この夏のはじめに報ぜられた。中国といつても西晋時代、全裸は全裸でも親しめる人、劉伶がいた。彼は竹林七賢の一人、生涯を酒楽のうちに過し、『酒德頌』まで著わしただけあつてか、痛飲のはて脱衣裸形のままで家のなかにいた。それを譏める人がいたので、「以天地為宅舍。以屋宇為禪衣。」と豪語したという。海のかなた、東の全裸族の意中は知るよしもないが、はたして彼らにしてこれほどの気宇の宏大さを持っているだろうか。

日本浄土教の絵画を代表する作品に浄土三

曼茶羅がある。このなか、智光曼茶羅をのぞいた当麻曼茶羅と青海曼茶羅との中尊阿弥陀如来は、右の片肩の衣を脱ぎ、右肩をあらわにして座し給うている。このような袈裟のまとい方を偏袒右肩<sup>へんだうけん</sup>という。遠くインドの僧形にその範を求められたまでのことで、とくに肩ぬぎされ給うたのは、湿気の多い日本の夏の蒸し暑さにたまりかねての所業ではない。この袒服は中国で社会問題となったことがある。親からうけた頭髮を剃り、しかも右肩をあらわに踞食する異様なみなりは、たとえ出家者と雖も礼教社会の許すところでなく、加うるに中華意識の過剰はついにこの袒服を矢玉にあげたことがあった。東晋代の何無忌は廬山の慧遠にこのことを質し、慧遠は『沙門袒服論』を著わして弁明したことがあった。ともあれインドと中国との風俗、習慣の違い、東晋代における出家・在家の諍論をこえて、仏教は中国に根をおろした。袒服を問題にされた中国の出家者が、いつの間にか袒服をやめたのは、礼教を尊ぶ中国社会に生きるための変貌であつたのだろう。

（昭14年卒 文学部教授）

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。